

第三百三十八回 青葉会

平成二十六年五月二十二日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉

☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 後藤保明 小西弘子 豊田ゆたか
星田啓子(新人) 山内天牛

〈投句〉

久米五郎太 小早健介 朱牟田惠洲 土谷堂哉 中野一灯 福島正明 古田昇 宮内規雄
山崎亜也 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 川口孤舟 楠田彦十 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明
村田くに子 山崎青史 山本三恵

《選者吟》

兼題『花菖蒲』『鯉』含む当季雑詠五句。投句二句

抜きん出る女系家族の鯉幟 万里子 (紀・保・正・青)
神苑の紫紺凜々しき花菖蒲 全 (堅・そ・猛)

鳩囲み歌ふ雀ら五月晴 全 (弘)

里帰りしても高値の初鯉 全 (ゆ)

さらきらと長蕊のこり躑躅散る 全 (く)

《五選句》

七点

白魚の光散らせり四手網 一灯 (孤・彦・龍・隆・正・啓・三)

六点

☆ 開け放つ農家の仏壇柿若葉 弘子 (万・彦・保・隆・く・天)

五点

☆ 葵祭牛車(ぎょしゃ)の軋み時代越え 保明 (万・猛・恭・正・天)

田植機を停めて歪みを振り返へる 弘子 (恭・彦・保・隆・正)

レース編む看板媼の鼻眼鏡(ブリュージュ) 堂哉 (そ・弘・ゆ・啓・天)

初鯉競(せり)の濁声(だみこゑ)響きけり 規雄 (恭・保・ゆ・允・天)

愛用の椅子を帖り更へ五月かな 天牛 (紀・弘・敏・隆・三)

厚切りの鯉喰らひて土佐談義 亜也 (堅・猛・弘・敏・く)

闇を吸ひ棚田に降り来る姫螢 盛雄 (堅・紀・猛・敏・啓)

四点

☆ 夏みかンドレスの妊婦通りすぎ 五郎太 (紀・忠・隆・天)

咲き満ちて牡丹明かりの登り廊(奈良の長谷寺) 堂哉 (万・堅・そ・允)

酒甕に抛げ入れてみる花菖蒲 亜也 (忠・龍・ゆ・三)

花曇り谷渡り来る鐘の音(吉野) そらお (孤・敏・啓)

三点

☆ 郷(くじ)失せし友と地酒に冷奴(浪江町出身) 紀久男 (万・そ・忠)

☆ 丘を抜く大船観音夏日さす 恭延 (万・忠・く)

繚乱の空を鎮めて花は葉に 昇 (猛・孤・啓)

余花の雨九郎自筆の腰越状 全 (紀・允・三)

二点

☆ 小舟より見るも良からむ花菖蒲(佐原) そらお (万・青)

☆ 千枚田見おろす岡に初夏の風 全 (孤・隆)

☆ 病院の送迎車待つ夏の冷え 猛 (保・敏)

☆ 国旗出す家珍しく昭和の日 恭延 (そ・允)

☆ 鯉幟朝に海向き暮は山 忠彦 (万・正)

☆ ほととぎす高み求むる恋の月 全 (恭・青)

☆ 花菖蒲泳ぐ魚に身じろぎし 五郎太 (龍・三)

☆ 鯉時(かつおどき)辛口冷やし友を待つ 保明 (龍・三)

☆ 菩提樹の樹下に吸ふ息聖五月 全 (そ・青)

☆ 朝市のまず筍が売り切れし 弘子 (恭・啓)

☆ 薫風や三味の音高き小唄振り(三越劇場) 恵洲 (青・天)

☆ 梅檀の花咲く古都や大聖堂(バレンシア) ゆたか (万・紀)

☆ 卯波立つ汀に放つブルーメラン 全 (万・允)

☆ 宇宙(おおぞら)を羽搏く姿花菖蒲 一灯 (万・ゆ)

正明 (紀・隆)

くるくると解(ほど)きて粽笹かおる

啓子 (孤・く)

土佐沖の益荒男振りや鯉漁

規雄 (堅・青)

☆ 尻尾だけ見せて燕は卵抱く

天牛 (万・ゆ)

うららかや苗木とりどり道の駅

そらお (正)

一点

團十郎一周忌法要「大護摩供」

精進料理(しょうじゆ)に冷酒も供せる成田山

紀久男 (忠)

金星を上げし新鋭花菖蒲

全 (彦)

春雪や紺碧緑(みどり)五色沼

猛 (恭)

鄙(ひな)の者なれど食いたし初鯉

全 (弘)

鱒開き一夜干して朝の膳

忠彦 (敏)

花菖蒲君の写真を捨てられず

全 (弘)

触れてなほ紙の花めく罌粟(けし)の花

弘子 (龍)

人招く宇治の新茶と鳳凰堂

健介 (保)

佳き句集恵まれし日の風薫る

惠洲 (忠)

コロンブス眠る寺院や針槐(はりえんじゆ)

ゆたか (允)

花びらを垂れて凜凜しや花菖蒲

全 (堅)

回遊を躊躇(ためら)つてゐる初鯉

正明 (紀)

気が付けば夏の花芽の伸び来たり

啓子 (彦)

冬瓜の出汁(だし)嗅ぎ分けて日本人

全 (龍)

玉串はあららぎの枝山開き

天牛 (く)

店の主鯉はないと恐縮し

全 (猛)

* * * * *

『川越吟行』

六月九日(月) 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 後藤保明 小西弘子 山内天牛

喜多院↓蔵造りの町並み↓時の鐘↓市民会館(句会場)

三点

遠来の友を迎へて貝風鈴

孤舟 (弘・保・天)

夏空へ迫り出す薨蔵の町

全 (紀・保・弘)

蔵の軒薄く切り飛ぶ夏燕

弘子 (孤・保・天)

紫陽花やないしよ話の羅漢さま

天牛 (紀・孤・弘)

二点

心地好く青葉に染まる羅漢かな

紀久男 (忠・孤)

ドタキヤン多き老頭児(ロウトル)吟行梅雨湿り

全 (忠・孤)

新緑や火伏せ銀杏の有難き

全 (弘・天)

慈恵堂の忿怒の明王五月闇

忠彦 (弘・天)

黒塗りの蔵造り通りを黒日傘

全 (弘・天)

杜鵑花(さつき)咲く春日局も見たる庭

天牛 (孤・保)

水羊かん売る大正ロマン夢通り

全 (忠・弘)

我に似し飲兵衛羅漢梅雨晴間

孤舟 (紀)

囁き合ひ梅雨を楽しむ羅漢どち

全 (忠)

家光とお福に会へり若楓

全 (天)

赤シヤツのガイド緑下の山門に

弘子 (忠)

護摩壇の火焰の褪せや夏の闇

全 (紀)

荒梅雨や古刹に残る昨夜(きご)の雨

全 (天)

梅雨晴間しみぬきの壁白く映え

天牛 (忠)

うんとんは川越弁よもちの花

全 (紀)

孤舟さん一押し鰻屋小川菊

忠彦 (保)

夏の陽に地藏の顔もうらめしげ

保明 (保)

●次回青葉会

六月二十六日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

七月二十四日(木) 丸紅

以上 文責 紀久男

一 今回は新人の啓子さん含む11名出席。投句は開始前に退出された五郎太さんを含め10名。先生からの菓子とつまみ、弘子さんの饅頭（うさぎや）、啓子さんの「大七」（二本松）、忠彦さんの「人気一」（二本松）、小生の「越州」（長岡）を賞味し乍ら開会。御覧のように弘子さん、一灯さん、保明さん、堂哉さん、亜也さんが好成績でした。堅さんへの取材記事掲載の「M・SPIRIT」5月号を回覧し、旧約聖書の翻訳本、竹橋ビル建替、大阪支社移転、三恵さんの名古屋転勤等話題にしつつ、いつもの盛会となりました。

二 関係者近詠

いつせいに落のたう咲く日本晴	万里子	片栗やロケットの如妻逝けり	規雄
子ら嫁かず娶らず猫の恋も減り	全	朝日俳壇4月21日 金子兜太選	
故郷への税を完納桃の花	全	評：「ロケット」に慟哭あり	
啓蟄や無性に歩き歌ひたく	眞希子	よき友の一に筈くるる友	恵洲
わづかなる利息も明記楓の芽	全	NHKラジオ5月10日 西村和子選	
たんぽぽや乳齒抜けしと開くる口	全	徒然草百十七段（よき友、三つあり、一つには	
幼子の見破る手品山笑ふ	全	物くるる友）が下敷の由	
三月菜ぼつちり祇園の昼弁当	弘子	職退きし男の矜持鱧の皮	盛雄
こぐらかる糸するすると鳥帰る	全	大怪我を乗り越えし師の薄暑かな	全
ここよりは奥の細道葦芽ぐむ	全	渡来種のをさばる湖へ驟雨かな	健介
芽柳のゆらゆら三橋美智也かな	全	般若面はめこむ土塀風薫る	紀久男
空へ行く土手の階段犬ふぐり	全	夏雲雀客待ち顔の渡守	全
風光る坂道下る歩を速め	恭延	「きさらぎ句会」5月	
友煮たるいかなご釘煮家苞に	紀久男	長谷寺や牡丹七千海なして	堂哉
「萬緑」六月号	允章	海女達の手柄の鮑濟州の浜	全
葉桜に日毎濃くなる影のあり	全	夏帽子犬に引かれる向こう岸	全
麒麟の首檻より抜けて風薫る	全		

川越吟行レポート

梅雨晴の川越：前々日、大雨洪水警報。過去最少人数の吟行で川越駅から喜多院へ。観光ガイド・佐藤氏（川越市のシルバー人材センター派遣）の懇切な案内に付いて回りました。

地元で40数年お住まいの孤舟さんから頂いた資料①当日の吟行案内②「につぼん俳句風土記」（「俳壇」24年6月号掲載の『川越吟行ガイド』）：孤舟さん執筆③俳人協会編「川越吟行」④散策マップで十分と思つていたんですが、ガイドさんの説明に過不足なく質問にも的確に答えておられ、納得した次第です。

見所多かつたんですが、皆さん句にありますように五百羅漢が印象深かつたようです。あと「転合（てんごう）な庭」：たいした庭とは思えないんですが、上方弁の名前が気になりました。

成田山別院、大正浪漫夢通り（昭和の神保町髻髻、商工会議所になつてゐる元・武州銀行等）、蔵造りの町並み（見応えある風格：土蔵造り、鬼瓦、袖壁。「時の鐘」、埼玉りそな銀行として現役の元・第八十五銀行本店等）。子規句碑等を見て市民会館へ。ガイドさんはここ迄。

句会は御覧のように披講された孤舟さんが最高点。会場や弁当（初かり亭）を手配された孤舟さんが美酒二本「神亀（じんがめ）」（蓮田）「鶴齢（かくれい）」（魚沼）提供され、有難く頂戴しました。小生なんぞ即酌酩。句を作る所ではありませんでした。

終了後、孤舟さんから「爽樹」の代表になられたと披露あり、皆様の祝辞を浴びておられました。駅前の「うどんや讚」で早速祝杯となりました。